

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

## ■第2章「一号機爆発」

福島第一原発一号機のベント作業

に突入したE班班長遠藤英由(51)

は、原子炉建屋地下の圧力抑制室上

にあるキットアウトと呼ばれる

通路で立ち止まった。

目指す弁まであと30分まで来、

線量計の針が毎時千 $\mu$ Svを振り切っ

ただ。

毎時千 $\mu$ Svなら原発作業員が5年

間で浴びる限度10 $\mu$ Svに6分

達する。だが針が振り切れたといっ

ことは、もう周囲の線量がどれほど

高いか推し量るすべはない。

「決断するまで2、3秒でしなね。

作業をして戻るとを考えると、」

の時点はまだ行程の4分1です。

5

## 弁まであと30分



原子炉建屋地下の圧力抑制室上にあるキットアウトと呼ばれる通路12(012年6月、福島第一原発3号機(東京電力提供))

# 「退去するしかない」

「私、それ以降は振り返らないで  
建屋1階の二重扉まで戻ったんで  
す。入ってる時に回した扉の一文  
字ハズレに手をかけた時、初めて  
後ろを見たら彼がいなかったんで  
す」

このまま行けばもうなるかってい  
いは考えました。退去するしかない、  
懐中電灯で通路を照らしたが察は  
ない。何かあったか。どうする。

5、6分後方から(班班長が)「  
その時、(班班長が)ゆくりと歩  
ちの方向に向かってきていた。お互いに  
アスをしている。叫ぶ子のジエス  
チャの方が伝わる」と遠藤は考え  
針の振り切れた線量計をかざして

「これ、これ」と指さしてみせた。  
「シヨックだったんでしょね。  
任務を達成できなかったという気持  
ちが強かったみたいです。もうこん  
ちが疲れもあつたでしょ…」

子だった。遠藤は「戻れ、戻れ」と  
後方を指さした。腕をつかんで引  
張り、強引に体の向きを変えさせた。  
員たちが一斉に遠藤たちを見た。

戻ると決めたら一刻も早くここを出  
なければならぬ。

「駄目だった。線量計が振りの切れ